

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	井岡 詩子
論文題目	ジョルジュ・バタイユにおける芸術と「幼年期」		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、20世紀のフランスを代表する哲学者にして作家のひとり、ジョルジュ・バタイユの特異な思想について、主にその芸術論と文学論に「幼年期 (インファンティア)」を鍵概念にして焦点を当てることで、独自の解釈を試みようとするものである。ここでいう「幼年期」には、複数の意味が含まれる。まず、語の本来の意味における「言葉の手前にあること」、さらに、遊戯性をめぐる美学的観点、抵抗や反抗という社会的な意味、エディプス期をめぐるフロイト的な問題系、儀礼や祭式におけるプリミティヴィズムなどである。本論は、序論と結論に挟まれて、以下の六つの章からなる。すなわち、第1章「バタイユにおける芸術の位置づけ——「アンフォルム」から「幼年期」へ」、第2章「絵画のインファンティア——ゴヤとマネ」、第3章「「幼年期」の芸術家と文学——ニーチェからカフカへ」、第4章「悲惨な生とフィクション——モロイ、浮浪者、遊び人」、第5章「性愛文学と遊戯的理性——サド」、第6章「性と死の絵画 (イメージ) ——エロス」、である。</p> <p>第1章では、『ドキュマン』誌において打ち出された「アンフォルム」概念の再考を通じて、それが模倣芸術に対抗する「子どもらしい行動原理 (主に反抗)」と結びつく点を明らかにすると同時に、『文学と悪』におけるテーゼ「文学とは [中略] ついにふたたび見出された幼年期である」とも密接に関連していることが指摘される。第2章では『マネ』を取り上げ、バタイユが、近代絵画の生みの親とされるマネの試みを、絵画に「沈黙」をもたらすことで絵画の伝統的な意味作用を破壊したと解釈する点、さらにそうしたマネの「操作」を「遊戯」になぞらえている点に注意を喚起する。それはまた、意識の運動に対立するのではなくてそれを完成させるという意味で、「還元の還元」とも言い換えられる。つづく第3章では、文学論『至高性』第四部と『文学と悪』のカフカ論に目を転じ、「革命家」としてのニーチェと「幼年期」の作家としてのカフカとが、バタイユにおいて対照的に捉えられていることの意義を指摘する。さらに、力への意志に向かうニーチェと、死に向かいつつも「父親の領域の内で除名された者として生きる」カフカとの差異の内に、バタイユの解釈の独自性を読み解く。</p> <p>バタイユによるベケット論を取り上げる第4章では、「沈黙」、「漂流状態の企て」、「有用性の世界への反抗」等において、バタイユによるベケット作品——とりわけ小説『モロイ』——の解釈がマネ論やカフカ論とも通底するものであることが論じられる。つづいて第5章では、「サドの使用価値」をはじめとする何篇かのサド論を検討し、バタイユのサド解釈がシュルレアリス</p>			

ムのそれと異なる点、「理性の遊戯的使用」——理性をその反対物である情念のために用いること——や、明晰な意識のもとでの暴力の事物化のうちに、バタイユがサド文学の特徴を読み取っていることが明らかにされる。最後の第6章では、バタイユ晩年の著作である『エロスの涙』につけられた230点余りの図版とそれらへの言及に注目し、そこにおいて、イデアリズムへの抵抗、「笑い」と「涙」のあいだを往復するものとしてのエロティスム、最終的に「涙」へと帰着するバタイユ固有のエロティスムが自己意識——ヘーゲルとコジェーヴを批判的に経由しつつ——へと開かれていく点が論じられ、このテーマもまた「ふたたび見出された幼年期」につながっていくことが確認される。

以上のように本論文は、反抗や遊戯性、有用性の破壊と至高性、叫び（過剰）と口ごもり（沈黙）、エロティスムと違反などの問題系と密接に結びついている「幼年期」というテーマが、バタイユの芸術論と文学論にいかに通底しているかを明らかにしようするものである。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀のフランスを代表する哲学者にして作家のひとり、ジョルジョ・バタイユの特異な思想を対象とする本論文の独自性は次の二点に要約できる。まず、とりわけバタイユの美術論と文学論に焦点を当てることで、その美学思想とでも呼びうるものを抽出し再構成しようとしている点がひとつ。次に、バタイユの美学を彼の思想全体のなかに位置づける、という点である。そのために参照され、詳細に分析・検討されるのは主にバタイユの次のテキストである。すなわち、『ドキュマン』誌、『マネ』論、『文学と悪』のカフカ論、ベケット論「モロイの沈黙」、未完の著作『純然たる幸福』のなかの草稿「遊び」、「サドの使用価値」をはじめとする何篇かのサド論、性愛文学論『エロティスム』、さらに晩年のユニークな造形芸術論『エロスの涙』などである。

これらのテキスト群を読み取り解釈するうえでキータムとなるのは、「幼年期（インファンティア）」である。これは、バタイユ自身が『文学と悪』の序文において、「文学とは〔中略〕ついにふたたび見出された幼年期である」と明確に述べているという事実に基づいている。つまり、「おとな」を経たうえで、「おとな」との葛藤において回帰される「幼年期」である。さらにこれを補強する意味で、本論文では、「言語活動の経験／実験」として「インファンティア」——語源的には「言葉の手前」という意味——を捉える哲学者ジョルジョ・アガンベンやジャン＝フランソワ・リオタールの議論が重要な参照点として要請されている。加えて本論を通じて、フロイト的な意味でのエディプス・コンプレックス、社会的な意味での反抗や違反、遊戯性、祝祭や儀礼と結びつくプリミティヴィズムといった問題系もまた「幼年期」と結びつけられる。

これまでのバタイユ研究では「アンフォルム」、「異質学」や「至高性」、「非 - 知」や「低俗唯物論」などといった主要概念によって解釈されるのが主流で、「幼年期」という観点からバタイユの美学思想、ひいてはその哲学の全体像が捉えられることはほとんどなかったと述べていい。その意味においても、本論文はきわめて独自の切り口を打ち出すものである。

以上のような問題意識と方法論に基づいて、六つの章で構成された本論文は、順に、『ドキュマン』における「アンフォルム」の批判的検討、近代絵画とりわけマネの「沈黙」の絵画をめぐる解釈、カフカにおける「子どもらしさ」と「除名された者として生きること」、ベケットの『モロイ』における「自制なきエクリチュール」、サドによる「違反」と「理性の遊戯的な使用」、笑いと涙のあいだを往復するエロティスムと自己意識、といったテーマをめぐるバタイユの議論を、それぞれのテキストを丹念に読み解きながら跡付け整理していく。そのうえで、バタイユの美学思想の特異性として本論文が新たに提起する結論は、以下の五点に要約することができる。

1. バタイユによれば、供犠や祝祭といった「時代遅れ」の手段にも幼児的な性格は認められるが、それは芸術における「幼年期」とは区別される。2.

近代芸術は、「おとな」の世界を構成し方向づける理性のはたらきを少なからず用いる点で、「ふたたび見出された幼年期」である。3. 「おとな」であることを経由しなければならないこのような「幼年期」は、戦略的に「おとな」となることを回避し、マイナーな存在であり続けることになるが、同時に消滅（死）と踵を接するものでもある。4. 徹底的な非従属性に支えられた身振りや、理性の形式による至高性へのアプローチは、ある程度の持続性をもった至高性を所有することを可能にする。その点で、「至高性」の一時性のみを強調してきたこれまでの研究は見直されなければならない。5. 「おとな」の世界が至上の価値とみなす有用性から理性のはたらきを解放するこの「遊戯化」という操作は、理性の可能性を拡げ、意識の歴史を進展させる鍵とみなすことができる。

以上のような「幼年期」をめぐる問題系は、これまでのバタイユ研究において看過されてきたもので、その美学、ひいては哲学の特異性を新たな観点から解明した点に本論文のもっとも高く評価すべきところがある。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年2月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降